

【静岡県】稲生沢川水系：論点整理表

河川及び流域の現状

河川及び流域の概要

- 稲生沢川は、下田市中心部に位置する流域面積74.4km²、流路延長15.1kmの二級河川である。
- 稲生沢川は、婆娑羅山に源を發し、支川と合流しながら下田市をほぼ真東に貫き、稲梓川と合流した後、ほぼ真南の進路を変え、蓮台寺川、敷根川、平滑川と合流して下田港へ流入する。
- 稲生沢川流域近傍の石廊崎特別地域気象観測所における過去10年間（平成15年～平成24年）の年平均降水量は1,785mmで全国平均の1,610mmを上回る。
- 河口から5.0k付近までは1/600～1/350程度の緩勾配であり、沿川は宅地が広がっている。また、5.0kより上流は1/250～1/100程度で、周囲は主に農地として利用されている。稲梓川合流点（9.0k）より上流は1/100以上の急勾配の急流河川である。
- 稲生沢川流域の土地利用は、山林・原野が9割を占めており、宅地やその他が1割である。なお、下流部は伊豆半島南部を代表する下田市の中心市街地に位置し、国道、伊豆急行など主要交通インフラが川に並行して整備されており、中上流部では昭和51年と比べ宅地化が進んでいる。
- 下流の市街地には古くからの歴史を語り継ぐ寺社、幕末の開港にまつわる史跡をはじめ観光施設が多く存在する。
- 稲生沢川流域の人口は、昭和53年の約2.2万人をピークに減少しており、平成26年では約1.5万人となっている。一方で、世帯数は平成9年の約7,500世帯をピークに減少に転じ、平成26年の総世帯数は約7,200世帯となっている。
- 下田市総合計画では、「景観や生態系に配慮した安全な水辺空間の整備」を基本目標として掲げている。その施策として、浸水の多い地区での雨水対策、未改修河川の治水対策、景観に配慮した水辺空間の保全、緑地や遊歩道の整備、河川を身近に感じる水辺空間の整備などを計画している。

治水事業の沿革と現状

- 稲生沢川流域では、過去数回にわたって豪雨災害や台風災害が発生しており、平成に入ってから平成3年や平成10年に洪水被害を受けている。
- 既往洪水の中でも甚大な被害であった、昭和51年7月の豪雨では、床上浸水1,372棟、床下浸水539棟などを被っている。
- 平成3年の局部的豪雨では、下流部での降雨は少なかったものの、上流部で大雨となり、内水被害や土砂災害が発生している。
- 河口付近（右岸側）で高潮による浸水被害や支川の平滑川沿いの住宅地で内水被害が頻発している。
- 稲生沢川水系では昭和51年7月の豪雨被害により「河川激甚災害対策特別緊急事業」に採択され、稲生沢川の河口から5k付近までと蓮台寺川を対象に河川改修が行われた。その後、稲生沢川では稲梓川合流部までやさらに上流区間の改良事業が実施された。一方で、蓮台寺川以外の支川では抜本的な改修は進められていない状況である。
- 稲生沢川河口部では不法係留船が多く確認されており、洪水の流下阻害や河川工事の実施の支障を引き起こすため、不法係留船に対する措置が必要である。また、不法係留船は、景観の阻害や、一般公衆の自由使用の妨げになっている。
- 静岡県第4次地震被害想定で稲生沢川では、施設計画上の津波は河川堤防を越えて約1.7km遡上するとともに、最大クラスの津波では河川及び海岸堤防を越流し、沿岸部で約120haの浸水が想定されている。

河川的环境

- 稲生沢川はA類型を目標としている。近年の水質調査結果からBOD値（75%値）は、環境基準を満たしており、現在の水質は概ね良好である。
- 稲生沢川の河川水は、水道用水・農業用水として利用されている。
- 稲生沢川流域における生活排水は、公共下水道整備と合併処理浄化槽の設置により対策を講じている。下田市では、平成26年4月時点で公共下水道接続率が約70%となっている。
- 下流区間では感潮区間を有するため、シロウオやボラなどの汽水魚が多い。また、静岡県版レッドリストにおいて絶滅危惧(A類)に指定されているシロウオや、準絶滅危惧(NIT)のカマキリ（アユカケ）が確認されている。
- 支川蓮台寺川が合流する中下流区間において、蓮台寺川上流より流入する温泉水による影響により高水温となり、冬季においても魚影が見られ、グッピーやカワズメなどの温水を好む外来種が確認されている。
- ヒアリングでは、特定外来種であるナガエツルノゲイトウの侵入が指摘されている。

河川の利用及び住民との関わり

- 許可水利権として水道用水1件の利用がある。慣行水利権としては農業用水13件の利用がある。
- 漁業権を有する団体は、稲生沢川非出資漁業協同組合であり、稲生沢川本流において第5種共同漁業権が設定されている。
- 河川空間の利用として、地元の小学生を対象とした川の自然観察会や3月には蓮台寺駅周辺で「あまご祭り」や河口より5.0kmの「お吉ヶ淵」で「お吉祭り」が開催されるなど、市民との関わりが多い。
- 地域住民に親しまれる護岸として、階段護岸が設置されている区間もあり、市民の休憩所・憩いの場としても利用されている。
- 支川の平滑川には、ベリーロード（黒船でやってきたベリー提督が了仙寺で日米下田条約締結の為に行進した道）があり、石畳の道が続き、伊豆石やなまこ壁の家並み、柳並木が独特の風情を醸し出している。
- 下田港は歴史と文化が息づく避難港として利用されている一方で、史跡や観光名所が今も面影を残っており、このような観光資源を活かした街づくりが積極的に進められている。
- 静岡県では、地域全体で身近な環境保護への関心を高めることを目的とし、リバーフレンドシップ制度を推進しており、稲生沢川においてもリバーフレンドとして河川清掃や除草、草花の植栽等の活動が行われている。

水系の特徴（着眼点）

治水

- 下流部は昭和51年の水害を契機として改修されたが、**中上流部では近年、宅地化が進んでおり、河川の氾濫等が発生した場合の被害が大きくなる**ことが懸念されている。
- 静岡県第4次地震被害想定に対する地震・津波対策**については、港湾管理者など関係機関と連携し、**地域住民との合意形成を図りながら、必要な対策を検討**していく必要がある。
- 観光地であることから、災害が発生した時には住民とともに、**観光客の安全確保にも配慮**していく必要がある。
- 河口部には不法係留船を含め、多くの船舶が係留され、洪水の流下阻害や、津波による流出などが懸念**されている。

河川利用

- 階段護岸整備の推進や川の自然観察会の開催により、人々の触れ合いの場所や憩いの場所として利用**されているほか、**河川空間利用も多く住民との関わりが深い**。
- 平滑川沿いや下田港周辺には観光名所が多く残っており、**観光資源や河川利用を活用して街並みと一体となった川づくり**が必要である。
- リバーフレンドシップ制度を活用した河川美化活動など、**流域全体で地域密着型の取り組み**が行われている。

環境

- 本川の水質は**A類型を概ね満足**しているが、下田市の**水道用水や農業用水の水源にもなっていることから、引き続き良好な水質を維持**していく必要がある。
- 下水道整備は進められているものの、**市民の満足度も約50%と高くなく、さらなる整備が望まれる**。
- シロウオやメダカ、アユカケ（カマキリ）など多様な動植物が生息・生育しており、これら**生物の多様性を確保するための環境を保全・創出**していく必要がある。
- 漁業権が設定され**アユ釣りが盛ん**であるが、頭首工など横断工作物が多く、**アユ等の生物の移動を阻害しないよう配慮**する必要がある。

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川整備の基本理念(案)

＜基本理念＞
開国の歴史に彩られた下田の観光まちづくりと調和を図りつつ、誰もが安全で安心して暮らせる川づくり、来訪者が快適に楽しめる水辺づくりを目指す。

●誰もが安全で安心して暮らせる川づくり

流域では、気候変動に伴う局地的豪雨による河川の氾濫や土砂災害の危険性が高まっており、下田市の都市機能が集中する下流部では南海トラフ地震に伴う津波による甚大な被害が想定される。このため、適切な治水施設の整備や維持管理のほか、関係機関や流域住民と連携しながら流域の保水・遊水機能の保全や避難体制づくりなど流域が一体となった総合的な防災対策を推進し、「誰もが安全で安心して暮らせる川づくり」を目指す。

●自然豊かで清らかな水が流れる川づくり

稲生沢川は溪流に始まり、河岸段丘を擁する中流部、感潮区間のある下流部を流れ、下田港に注ぐまでに多様な変化を見せ、貴重種が生息する豊かな環境が残されている。このため、多様で豊かな水辺環境の保全と復元に努めるとともに、自然の営みや健全な水循環などを考慮しながら後世に継承する「自然豊かで清らかな水が流れる川づくり」を目指す。

●自然と歴史を活かし、やすらぎと活力のある美しい水辺づくり

稲生沢川の河口部周辺には、開国の歴史を彩る下田港をはじめ、貴重な歴史的資産等や観光施設があり、多くの来訪者を迎えてきた。今後の観光まちづくりにおいては、地域資源を活かしながら、暮らす人も訪れる人も快適な水辺空間であることが重要なことから、流域住民や関係機関と連携して「自然と歴史を活かし、やすらぎと活力のある美しい水辺づくり」を目指す。

河川整備の基本方針(案)

ア. 洪水、津波、高潮などによる災害の発生の防止
または軽減に関する事項
災害の発生の防止または軽減に関しては、河川の規模、既往の洪水、流域内の資産・人口等を踏まえ、県内その他河川とのバランスを考慮し、年超過確率1/50規模の降雨による洪水を安全に流下させることのできる治水施設の整備を目指す。
整備にあたっては、河口付近での高潮による浸水被害や、支川における内水被害などへの対応についても配慮する。
また、雨水貯留浸透施設の整備、上流域における砂防事業との連携や適正な森林保全の働きかけなど、流域が一体となった治水対策を推進するとともに、将来にわたる流域内の適正な土地利用がなされるよう関係機関との調整・連携を図る。
さらに、気候変動の影響等による局所的豪雨や、想定を超える洪水、整備途上段階で流下能力以上の洪水が発生した場合においても被害をできるだけ軽減するため、住民や観光客等滞在者を迅速に避難させる警戒避難体制の整備などソフト対策を平時時から推進する。
河川津波対策に関しては、発生頻度が比較的高く、発生すれば大きな被害をもたらす「施設計画上の津波」に相当する計画津波に対しては、人命や財産を守るため、海岸等における防御と一体となって、河川堤防等の施設高を確保することとし、そのために必要となる堤防等の嵩上げ、耐震・液状化対策を実施することにより津波災害を防御するものとする。発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす「最大クラスの津波」に対しては、施設対応を超過する事象として、住民等の生命を守ることを最優先とし、地域特性を踏まえ、関係自治体との連携により、土地利用、避難施設、防災施設などを組み合わせた津波防災地域づくり等と一体となって減災を目指すとともに、「施設計画上の津波」対策の実施に当たっては、必要に応じて堤防の天端、裏法面、裏小段及び裏法尻に被覆等の措置を講じるものとする。

イ. 河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び河川環境の整備と保全に関する事項

河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持に関しては、流況の把握に努めるとともに関係機関と連携しながら流水の適正な管理等に努める。
河川空間の適正な利用に関しては、稲生沢川流域の成り立ちや歴史、治水対策の必要性、動植物の生息・生育などの自然環境、景観等を守るとともに、人が川とふれあうことのできる空間を確保するよう努めるとともに、河川利用者への情報提供や河川利用者のマナーの向上を図っていく。
河川環境の整備と保全に関しては、河川を軸とした周辺の水田、河畔林、後背湿地やため池等が地域の貴重な水辺環境であることに注目し、山地と海、周辺環境との連続性や多様な河床を構成する砂州や瀬、淵等の保全・創出に努めるとともに、学識者、地域住民等との連携のもとに、目指すべき環境について関係者が共通の目標を持ちながら取り組むものとする。
また、流水の正常な機能の維持や豊かな河川環境の保全には、流域全体で取り組むことが重要であり、農地の適正な管理や下水道の接続等について地域住民や関係機関等に働きかけ、健全な水循環の維持に努める。

ウ. 河川の維持管理に関する事項

河川の維持管理に関しては、災害の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び河川環境の保全の観点から、河川の持つ多面的機能が十分に発揮できるよう地域住民や関係機関と連携し、堤防・護岸等の治水施設の状態や河道の自然環境、土砂堆積などに関する点検やモニタリングを行い、必要に応じて補修・修繕を実施する。
また、許可工作物についても適切な維持管理や洪水時の操作等を行うよう施設管理者に働きかける。

エ. 地域との連携と地域発展に関する事項

川の自然観察会や川を舞台にした祭りや地域の繋がり強い稲生沢川において、流域の歴史・文化、豊かな自然環境を踏まえ、個性ある地域の発展が促されるよう、地域住民や関係機関との協働による河川整備を推進する。
地域住民の河川に対する高い関心を維持し、さらに高めたいため、河川に関わる地域住民の活動を継続的に支援するとともに、関係自治体のまちづくりとの調整と連携を図る。
また、自然環境の特徴、水害のリスクや特性、河川整備状況など、河川に関する情報を幅広く提供することで防災意識や河川愛護意識を啓発するとともに、要配慮者対策を支援し、さらなる地域防災力の向上を図る。